別世界巻

絵　耳鳥斎

注意。
この電子図録は、模写作品です。
ご了承の上お楽しみ下さい。
不鮮明な部所については適当に
作り上げており、オリジナルとは
若干異なる場合がございます。
予めご了承下さい。

おじゃらりか模写

◆　はじめに　◆

この電子図録は、模写作品です。
ご覧になる方は、その旨をご了承の上
お楽しみ下さい。
オリジナル作品は関西大学の図書館に
収蔵されており、一般には公開されていないようです。私もまだ拝見したことはありません。

この図録は、『耳鳥斎（にちょうさい）』という作家の描いた
「別世界巻」という巻物を、テレビ映像を見ながら模写した作品集です。
二〇〇七年九月に、テレビ東京で放送された
『美の巨人達』という番組で紹介され、
拝見した私は、おおいに心を動かされました。
模写は、優れた芸術性や、観客を楽しませようと
いう創作者の意思、テーマの普遍性について自らが学び取る習作のためです。

稚拙な模写ではありますが、「耳鳥斎」の優れた作品を多くの方に知っていただきたいという気持ちから電子図録化し、インターネット上で公開することに致します。

テレビを見ながら絵を描いたため細部が不鮮明な部所については適当に判断し描き進めています。尚、冒頭の文面解読困難のため割愛します。

また、古い時代の作品の模写のため、時代に適さない作品もあるかと思われますが、巻の模写習作ですので、削除しない形で公開致します。

著作権に関しては、テレビ映像をそのまま利用するわけではありませんので、著作権を侵害しないモチーフを利用した二次的著作物に該当し、法的には問題ないと考えております。

不都合がございましたらお知らせ下さい。

本の公開を削除致します。

◆　耳鳥斎について　◆

生まれ年不明　〜　一八〇二年頃没

住居はおそらく大阪区西区京町堀辺り、多くの商家のあった場所で、耳鳥斎も商家の出で、後に骨董商に転向したと伝えられる。

◆　別世界巻について　◆

一七九三年頃に描かれたとされている地獄絵図。『悪いことをすると地獄に落ちる』という話をユーモラスなテーマやモチーフにより、二十一枚の作品にし、絵巻にまとめられた。

巻物の幅は二十センチ余り、長さは十メートル以上に及ぶ。

◆　模写について　◆

二〇〇七年の十一月二十六日頃開始、二〇〇八年の二月五日完成。

別世界巻

耳鳥斎の好んだ言葉

世界ハ、
是レ即チ
一ツノ大戯場

絵 耳鳥斎／模写 おじゃらりか

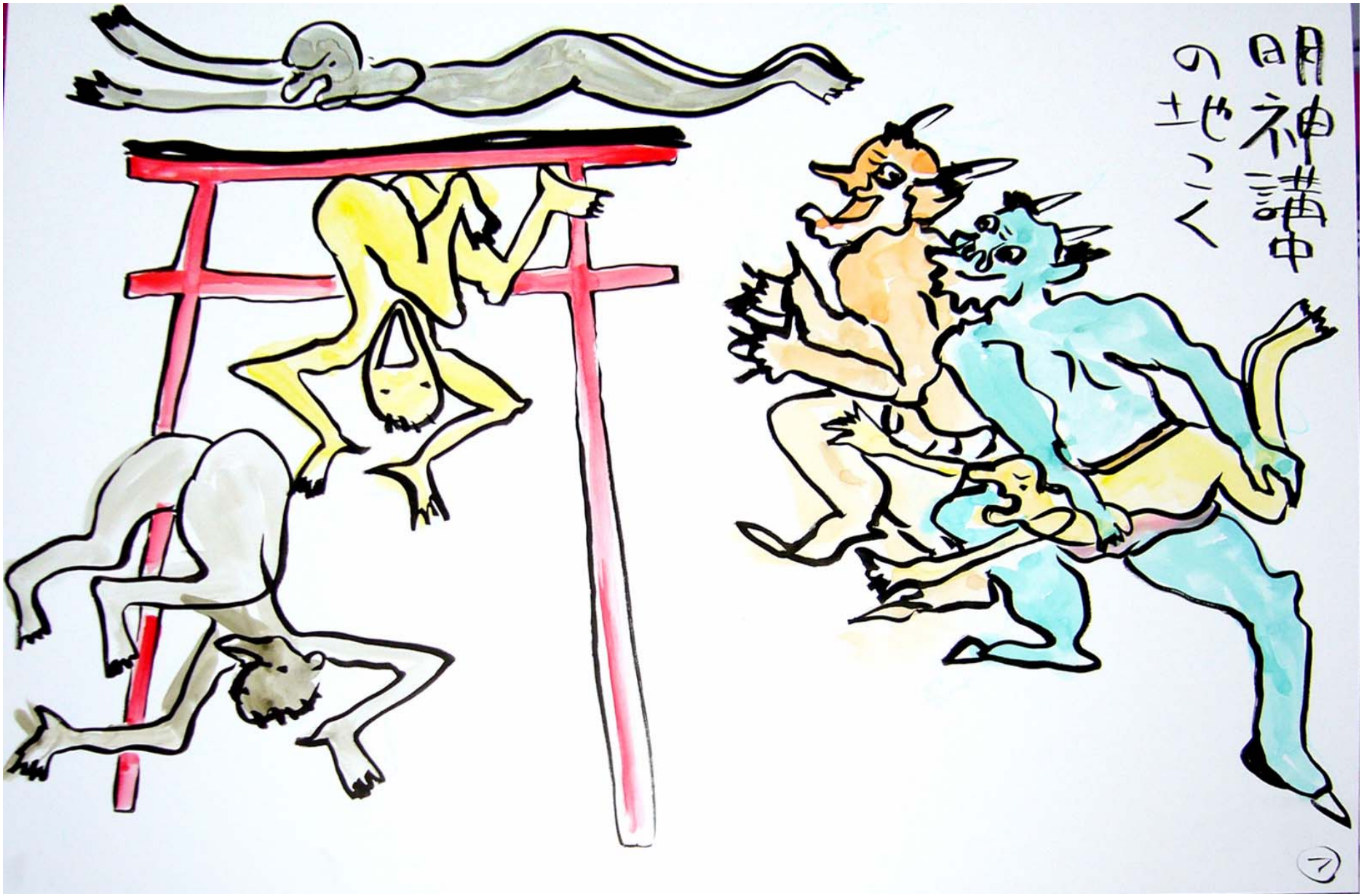
(C)おじゃらりか模写　2007-2008

(C)おじゃらりか模写　2007-2008

(C)おじゃらりか模写　2007-2008

(C)おじゃらりか模写　2007-2008

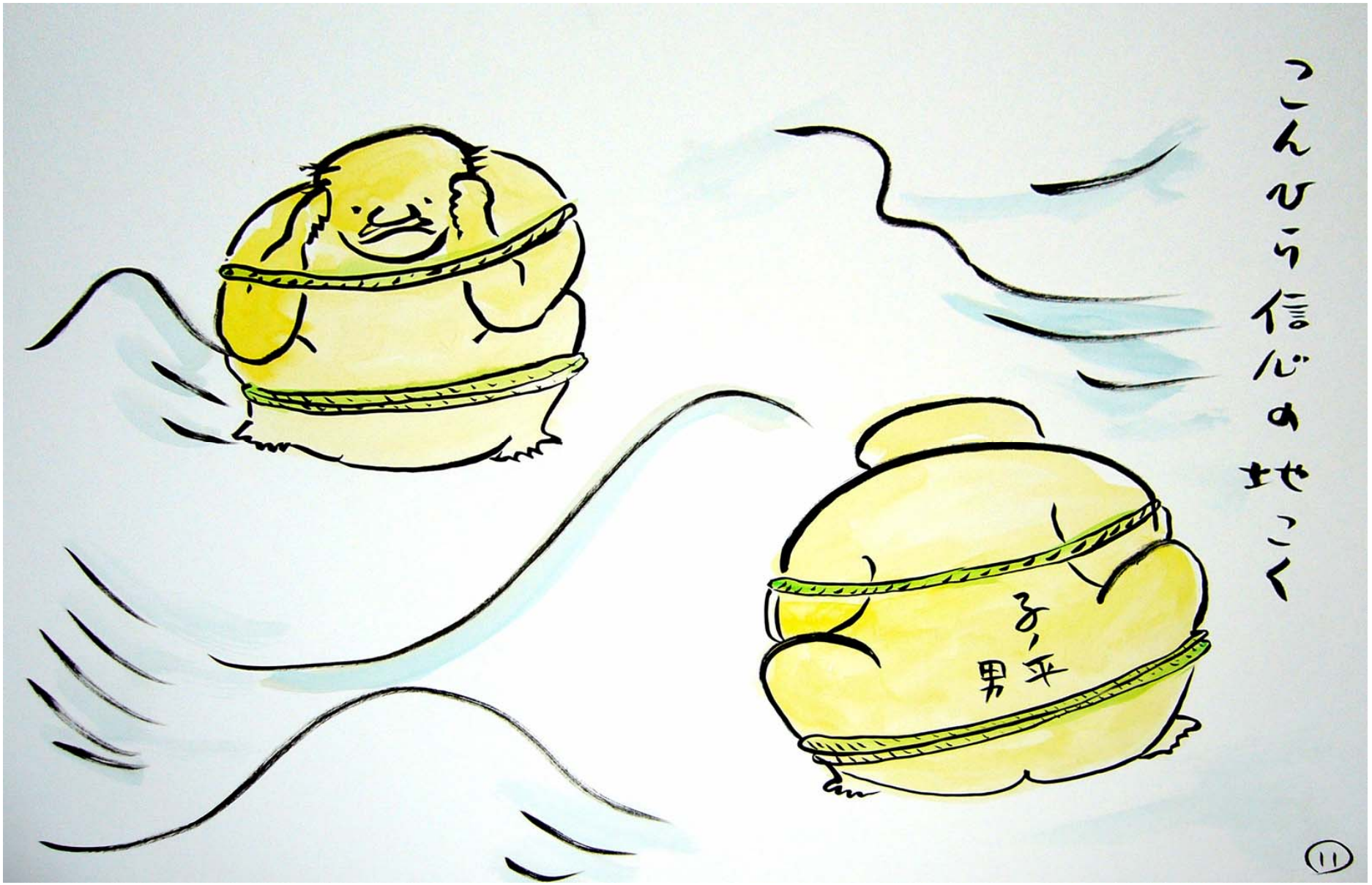
(C)おじゃらりか模写　2007-2008



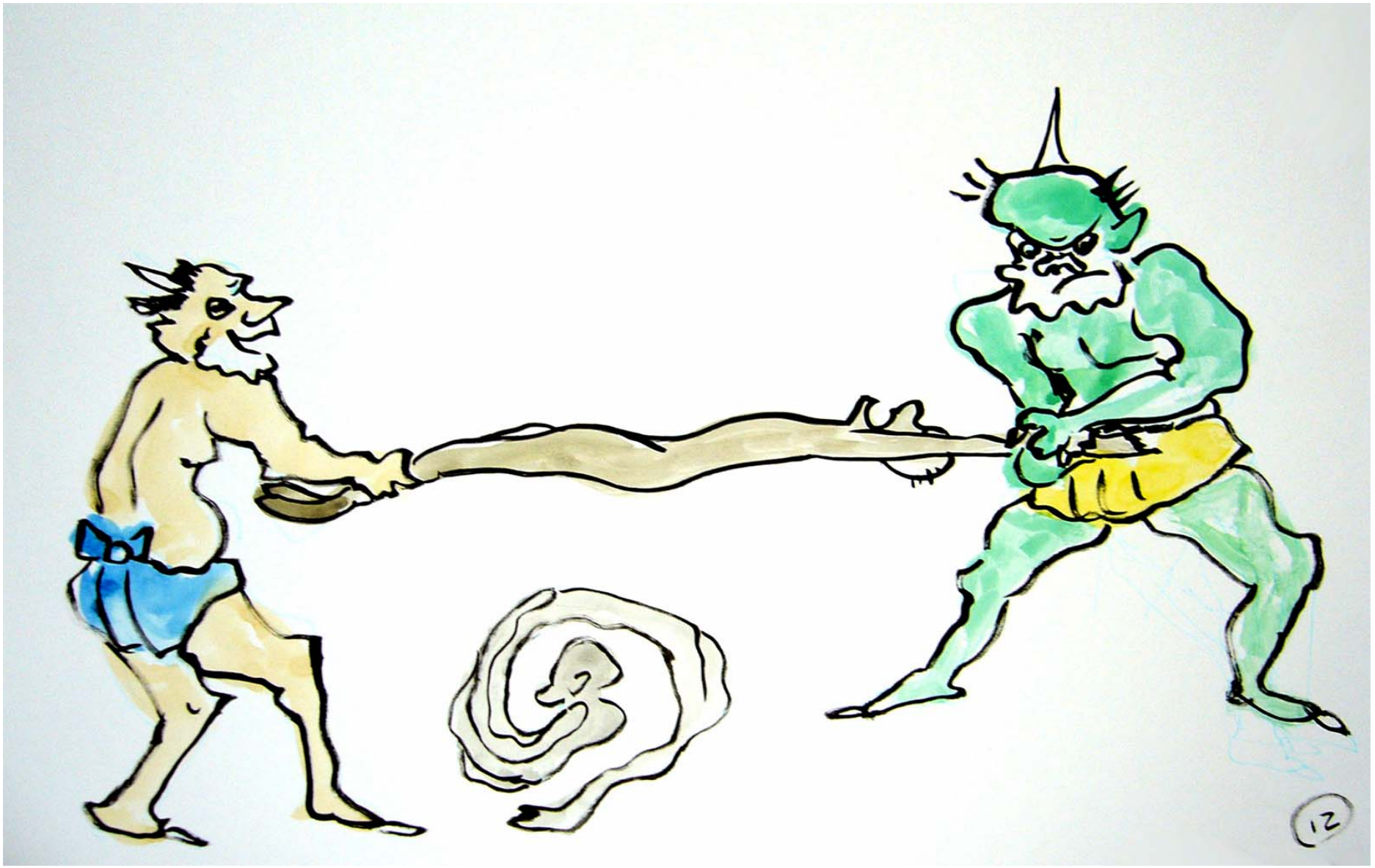
(C)おじゃらりか模写　2007-2008

(C)おじゃらりか模写　2007-2008

(C)おじゃらりか模写　2007-2008



(C)おじゃらりか模写



(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

（C）おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

(C)おじゃらりか模写

あとがき

◆　あとがき　◆

地獄絵図というのを一度描いてみたかった。

もともとの絵が大きいこともあり、細密画はあまり得意ではないのだが、美しいだけのものよりも、生そのものに表裏する本質的な表現を、もっと学びたい。そういう意欲もあった。

そんなときに、テレビで耳鳥斎の『別世界巻』を拝見する。確か、二〇〇七年の九月頃である。私は、長い間探していたものが見つかったような、そんな嬉しさに満たされていた。

ビデオに録画していたその番組は、二度、三度と見た。描画そのものは短時間に済みそうだし、その割には優れた芸術性を備えている作品群のため、とうとう模写してみようかという気持ちになる。

この巻に収録された、二十一枚の絵というのは、習作の目標にするには、丁度良い枚数である。多すぎれば挫折するし、少なくては練習にならない。

意図するところは、絵の模写そのものではなく、その絵に秘められた絵のもつ芸術性を少しでも理解するためである。

ぐずぐずしていたが、いよいよ、模写を開始する日がきた。以前テレビで拝見した、片岡鶴太郎さんの絵画教室の番組で使われていた、「水溶性チャコペンシル」を購入したからである。

水に濡れるとスっと色が消える、洋裁の目印をつけるためのペンであるが、これならば、画面を汚さずに下絵を描画、一気に色塗りに入れるのだ。

すぐにでも、新しい道具の使い心地を試したい。

十一月、描きたい、描きたいと思いながらなかなか実現できなかった模写が、いよいよスタートしたのだった。

印刷屋さんから頂いた、Ａ２サイズの少し厚めの白い紙に、一気に描き進む。

チャコペンシルでおおまかなアタリをつけ、水彩絵の具で色を塗ってしまう。

そうして、そのあと、墨液タイプの筆ペンで、最後の線を作る。失敗できない一発勝負である。

エンピツと消しゴムを使ったときのような、スジや跡が残らずに、画面は美しく仕上がってくれた。

後に、チャコペンシルの線は、１ヶ月程度経つと自然に画面から消えてくれることも解った。

私は、どんどんと、何枚かの模写を進める。

何を持って、本巻に芸術性を感じたのか、また、何故それを多くの方に知っていただきたかったのかを少し書くことにする。

『芸術性』というものは、漠然とした表現のように思えるが、評論家とか、収集家、創作者は、確固たる指標を持っているはずなのだ。

例えば、私の場合、作品に現れた『動き』を、特に重要に感じている。
その作品に、動きがあるかないか。
あればマル。なければパスである。

絵が巧いとか、作品に透明感があるというのは、当然の話で、それ以外は論外。

この巻は、地獄絵だというのに画面には、ユーモラスな瞬間が描かれており、作品の動きも優れている。

絵に動きがあるのかないのか。
表現を変えれば、それは、『瞬間表現が優れているか否か』ということに他ならない。

瞬間表現とは、何を指すのかといえば、

- 喜怒哀楽（内面表現）の描写
- 画面の躍動感
- 風景であれば、景色に潜む作者の内面的な感情もしくは極まった美しさ、荒々しさ
- その絵の説明しようとする場面の面白さ
- その場の示す内容の面白さ

などであると私は考えている。

例えば、ピッチャーがボールを投げるとする。
アナタは、どの瞬間を切り取り描くのか。
ボールを投げる瞬間か、タマが宙を浮いているところか、バッターに打たれているところか、それとも、ミットに球が入り、ストライクと審判がポーズを取っている瞬間なのか？

それとも、ホームランを打たれ、ピッチャーが泣き崩れている瞬間なのか？バッターのヤッタという顔なのか？

どの瞬間を切り取るのかが作家の感性であり、どう描くのかは作家の技術力ということになる。

次に見ている部分は、その作品が面白いかどうか。新しいかどうかである。

こんな作品は見たことが無いなとか、こちらを驚かせようとして作っているなとか、スケールが大きいなとか、金がかかっていそうだとか。

作品の発表と鑑賞というのは、「作家」対「鑑賞者」の真剣勝負だと考えてくれればいい。

たとえば、ジャンケンを思い出して欲しい。

『ジャンケンポン』をする勢いで作品の前に立つ。

その瞬間、『この作品面白いなぁ』とか、『こんな

作品、見たことない』、『この人にしか作れない作品だな（オリジナリティーに溢れている、個性がある）』、『スゲー』、『何がなんだか、サッパリ解らない』などと思わせたら、作家の勝ちなのだ。これらのリアクションは、作品に心が動かされたときに起こる感情だからである。

逆に『どこかで見たことある』とか、『まあ普通』、『こんなの欲しくない』などと思ったら、見る側の勝ちである。

安易な説明ではあるが、展覧会などを見に行っても、心を動かされる作品になど、そうはお目にかかれない。もし1点でも、そういった作品に会った日は、それはもう、ほくほくとし、後日知人に話しまくってしまう。

それが、アートの力というものである。

次に私が重視する鑑賞のポイントは、絵の持つ意味、普遍性、問題提起性ということになろう。

スペインの巨匠、ゴヤの版画集『ロス・カプリチョス』などにも、この地獄絵と共通する動きや普遍を見出すことができる。

もし、これをお読みになっている方が、アートの初心者で、この先絵の一枚でも買おうと思っているのであれば、作品を見るときには、

●動き（感動表現、瞬間表現を含む）

●作家が、鑑賞者に何らかを投げかけている作品かどうか？（笑わせよう、楽しませようとしているとか、謎をかけているとか、人間の善悪の教訓であるとか、普遍的な人間の行動、戦争や人間の愚かさや悲惨さ、などを指す）

このニつがあるかないかをチェックしてみて欲しい。たったこれだけを満たしている作品がいか

に存在しないのかを知ることになるだろう。

私は、これらの項目を鑑賞のポイントとし、作品を見るごとに、チェックシートにポイントを加算するようなやり方で作品の評価をしている。

作品の評価基準というのは、評価者それぞれに違うものであり、私のやり方は絶対的な考え方では到底有り得ないのだが、優れた評論家（金を握らされてウソを書いたりしない人物）であれば、似たような認識の上で作品の鑑賞を行っているのではないかと類推している。

どんな作品にも創作の物理的な制限があるわけで、私がチェックとしている全ての項目が優れている作品というのは皆無である。

一つか二つ満たされていればヨシという世界だ。世の中に溢れているほとんどの作品は、私のチェ

ック項目の、一つも丸がつかないというのが実態である。

現代アートには、作品そのものには意味がないという作品もないわけではない。作品には意味がなくとも、作家は、その作品を通し何らかの意思を発表（もしくは問題提起）をしているわけで、そういったものを解き明かしてゆく鑑賞の楽しみ方というのも存在する。この話は、また機会をみつけて、是非ご紹介したいと考えている。

ここまで読んだあなたは、もう一度、この作品集をはじめから見て欲しい。

サラリと描かれた鬼と、地獄に落ちた人間の苦難の表現の中には、極まった瞬間表現、画面を動かすテクニック、見る人を笑わせようという意思、日常生活の中の笑いや普遍的な悪習などが盛り込まれている。

解説がないと、意味が解らない作品もいくつか含まれていて、その絵は、今となっては普遍性に欠けていたという評価になる。

「別世界巻」は、面白いモチーフに溢れていて、作者が人を笑わそうという意図を感じる。見る人を楽しませることを目的に作られた作品ということになる。

芸術というのには、『芸』という文字が入っている。

この文字には、『芸人さん』とか、『芸子さん』『エ芸品』と同じように、人を楽しませるために、稽古、芸を磨くという作業を続けてゆく覚悟が感じられる。

美術品というのは、ただ美しければ良い。

ああ、美しい。

それで必要条件を満たしているのである。

ところが、芸術品となれば、美しいだけでは、必要条件を満たさない。鑑賞者を楽しませるための、何らかの工夫（芸）が、作品の中から発せられているのか否か。

作品の中に潜む芸術性というものは、そういった表現のことを指すのではないのか？最近私は、そんな風に感じるようになった。

一体どんな条件を満たせば、芸術作品と呼ばれるのか？

創作者は、まず、その必要条件を理解しなければならない。目指すべき場所を理解できていないのであれば、作ることなど到底できっこないからだ。

創作者とは、旅人である。

芸術とは何かを探すため、旅を続けているのである。答えというのは旅と同じように、作家それぞれが個々に見出すものである。

見つかる人は幸せで、その場に安住することもある。

だが、真の創作者であれば、一旦は答えを見つけたように思っても、満たされたりはせず、甘んずることもなく、きっとまた次の旅にでることになる。

私の旅もまだ始まったばかりであるが、この、『別世界巻』の中に学ぶことは多かった。

芸術という言葉の中に潜む『普遍』という重みを背に乗せ、また次なる旅にでかけなければならない。

二〇〇八年二月八日

絵　耳鳥斎　／おじゃらりか模写

文　おじゃらりか

あとりえおじゃらの本

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

電子画集

耳鳥斎『別世界巻』模写

ネット配信版　フリー

ＣＤ版　¥500

発行　二〇〇八年二月八日

模写絵と文　おじゃら　りか

発行者　小山田　理花

発行所　あとりえ　おじゃら

〒120-0034

東京都足立区千住五-二十六-十

E-Mail:rica@ojara.net

http:// ojara.net

ISBN4-9784 901941-23-2　C-0871¥500E

©　おじゃら　りか

お気づきの個所がございましたら、ご面倒様でも、E-mailにてお知らせください。

よろしくお願い致します。

あとがき おじゃうの本

http://ojara.net